

鳥取大学舞踊・身体表現研究室ではわらべ館（鳥取市の童謡とおもちゃのミュージアム）の「おととからだであそぼう～即興音楽とダンスのワークショップ」とあわせ、2020年より「新井英夫さんと学ぶ野口体操と体奏講座」を開催してきました。

「オドることは生きること」と題したミニシンポジウム1回目は、可児市文化創造センター ala の栗田康弘さんをお招きして公共劇場から福祉や教育へと広がっていく可能性を学びました。

2回目は真庭市図書館館長の西川正さんをお招きして、公的支援を待つのではなく、共助の実践例を伺いながら、自分たちで地域課題をアートでほぐすためのかわりしりの作り方を考えました。

心がオドるということで、ダンスにこだわらず、様々な表現を扱ってきましたが、3回目になる今回はあえて私たちがなぜダンスと身体にこだわっているのかをお話ししていこうと思います。

今年度は毎年恒例のグループトークの時間を設定できませんが、ぜひご参加ください。



新井英夫（あらひでお）

体奏家・ダンスアーティスト。1966年埼玉県生まれ東京在住。

自然にならぬ力を抜く身体メソッド「野口体操」を創始者より学び深い影響を受ける。投げ銭方式の十五夜野外劇など、劇場からマチに出るユニークな劇団活動主宰を経て、のち独学でダンスへ。国内外での公演多数。舞台活動との両輪として、乳幼児から高齢者まで障害の有無に関わらず幅広い対象に向けた「ほぐす・つながる・つくる」表現とコミュニケーションのワークショップを教育・福祉・社会包摂等に関わる現場で実施。2022年夏に神経性難病 ALS（筋萎縮性側索硬化症）の確定的診断を受ける。現在、病と向き合いつつ「不自由の中の自由」を模索しながら「にもかかわらずオモシロク」をモットーに“当事者”“支援者”の両域の視座から新たな活動や発信を継続中。



板坂記代子（いたさか きよこ）

手仕事・造形・身体表現を分け隔てなく活動してきた。「てきとう手しごと工房」主宰。

大学で銅版画制作・個展を行っていた頃、新井英夫の野口体操と「体奏」に出会い、即興をベースにした身体表現を学ぶ。2010年より新井とともに舞台公演活動および身体と造形のワークショップを実施している。自らを「カラダから生まれる何かをやる人」と称する。今は、パートナー新井の身体ケアと身体表現の間を行き来しながら、「どうしようもない毎日」に手を動かすことで世界と対峙している。



北山真樹（きたやま まき）

作業療法士 1993年に作業療法士となり病院勤務を経て、念願だった青年海外協力隊にてヨルダンへ。

アラブの文化を満喫し、リハビリ施設の子供達や村の人達の優しさに感動して帰国。帰国後は国際協力を仕事にしたいと、オーストラリアに留学して作業療法を学び直す。その後、ニュージーランドやデンマークでも福祉について学ぶ機会を得て、文化や言葉が異なる場所でも、赤ちゃんからお年寄りまでどんな人にも関わることができる作業療法の普遍性を強く感じた。人は作業をする存在で、作業がその人の生活、役割、人生を形作っている。社会的状況や障害や疾病などにより「生きる意味」を見出す作業ができなくなった人達に、作業療法士は関わる。その人が自分らしく人生の舞台で光り輝けるように、黒子になってお手伝いをすることが作業療法士の役割だと感じている。現在は、あすか山訪問看護ステーションに勤務し訪問の作業療法士として働きながら、疾病や障害を持ち在宅で暮らす方々の社会参加を応援する活動にも取り組んでいる。



木野彩子（きの さいこ）

札幌生まれ。幼少よりモダンダンスを始め、40年以上踊り続けている。元中高保健体育教員。

2004年に文化庁新進芸術家海外派遣制度で渡欧、2009年まで Russell Maliphant（英）の下でカンパニーダンサーとして生計をたてながら作品製作を続けてきた。帰国後、当時見てきたコミュニティダンスワークや教員としての経験を活かし、ワークショップなどを展開。

2016年に鳥取大学地域学部へ赴任後もダンサー（踊子）と教員の二足の草鞋をはく。

鳥取では即興音楽とダンスを街中で展開する「鳥取夏至祭」（2017-2023）、「鳥取銀河鉄道祭」（鳥取県総合芸術文化祭 2019）など企画運営側に回ることが多い。

最近、コミュニティワークは向いていなかったことに気がつき、そもそもの舞踊についてのリサーチを続けている。